

観光業で役立つ 日本語力の習得をめざして

ケニア ケニアウタリーカレッジ 語学部

講師 **オンソゴ ローズマリー ケルボ**
長崎清美 青年海外協力隊員

このコーナーでは、特色ある日本語教育を実践している機関の教師の方々に、現場のコースデザインやコース運営の状況について、紹介していただきます。



デモレストランでお客様役の学生を相手にサービスを勉強中

1 はじめに

ケニアウタリーカレッジは、観光業に従事する人材を育成するための観光省直轄の観光専門学校である。カレッジには、ホテルマネジメント、フロントオフィス、ツアーガイド、トラベルオペレーション、フードプロダクション、サービス、ハウスキーピングなど、ホテル産業と観光業に関するさまざまなコースが設置されている。カレッジにはホテルが併設されており、ホテルコースの学生は教室での学習と同時に、実務に則した学習も行えるようになっている。

観光に外貨収入を頼っているケニアにおいて、外国語

のできるホテルマンやツアーガイドなどの育成は大変重要である。カレッジには、フランス語、ドイツ語、イタリア語、そして、日本語のコースがあり、全学生に対する選択必修科目になっている。日本語コースは、日本人観光客の増加に伴い、1993年、青年海外協力隊員の派遣によって導入された。現在は、約100名の学生が日本語を学習している。

2 コースの概要とカリキュラム

コースは、「初級」、「中級」、「上級」の3つがあり、それぞれ160時間が課せられている。各コースともに、2時間の授業が週4日あり、2ターム(1ターム10週間)

で1コースを終了し、6ターム(約1年半)ですべてのコースを終えることになっている。

各コースには、便宜上、「初級」、「中級」、「上級」の名前が付けられているが、初級が「みんなの日本語Ⅰ」13課終了程度、中級が「みんなの日本語Ⅰ」終了程度、上級が「みんなの日本語Ⅱ」レベルである。

学生は、卒業前に、ホテルや旅行会社での3ヶ月から6ヶ月の実習に出ていく。実習先、また卒業後、実際の職場で役立つ日本語力の習得が当コースの到達目標であり、授業では、メインテキストに沿った基本的な文法の指導にとどまらず、こうした実務的なスキルを身に付けさせることに力を入れている。

3 教師の配置、連携のあり方

現在、ケニア人講師2名と日本人講師1名(青年海外協力隊員)が6コースを担当している。ケニア人講師のひとり、1996年9月から9ヶ月、国際交流基金の海外日本語教師長期研修に参加している。日本から遠く離れたケニアでは、残念ながらなかなか「日本」に触れられるチャンスがないのが現状である。もうひとりの講師も、こうしたプログラムに参加して、日本語の教え方だけでなく、「日本」に触れるチャンスを持ちたいと願っている。

3人の講師は、それぞれのクラスを担当しており、特にチームティーチングの形はとっていない。しかし、空いている時間を利用して、他の講師のクラスで、会話練習やロールプレイの相手をしたりしている。実際の場面を考えた会話練習では、状況をしっかり示したモデル会話を見せることが重要だが、教師の一人二役には限界があるので、他の講師と協力して行うようにしている。

また、ケニア人講師と日本人講師は、お互いの得意分野を生かして協力するよう心がけている。



授業風景。学生の人数はコースによってさまざま

日本人講師は、月何回か日本文化の紹介をケニア人講師のクラスで行っている。日本について知ることは、日本に対する興味を高め、ひいては日本語への学習意欲を高めるのに役立つと考えている。また、将来、日本人に接したとき、こうした知識がスモールトークに生かせるのではないだろうか。

ケニア人講師は、自分自身が学生の立場で日本語を学習してきたという経験があり、この経験をもとに、ケニア人学習者にとって日本語の何が難しいのか、どうして間違いをおかすのかを日本人講師にアドバイスしている。ケニアの公用語は、スワヒリ語と英語であるが、ケニア人はそれ以外にそれぞれの出身地のことばを話している。この母語は、他の言語(スワヒリ語や英語)に大いに影響を与えている。こうした知識をケニア人講師から得ることは、日本人講師が授業を進めるうえで大いに役立っている。

また、他言語の講師からも得るところは多い。専門会話の指導においては、教材、教え方などのアイデアを交換して、良いものはどんどん取り入れるようにしている。

4 使用教材

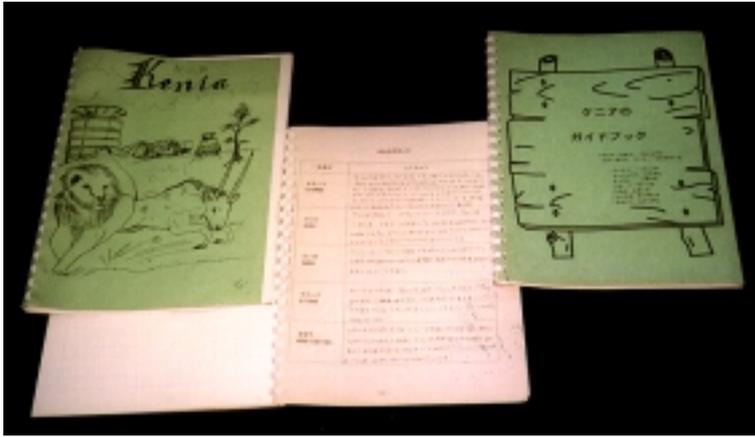
基本文法の指導には、「みんなの日本語」Ⅰ、Ⅱ(スリーエーネットワーク)を使用している。以前、使用していた「新日本語の基礎」Ⅰ、Ⅱ(スリーエーネットワーク)に比べると、場面設定が一般化されているが、ドリルのキューや会話文などには、カレッジの学生とは縁のなさそうなものも多い。学生の負担を軽くするためにも、なるべく場面設定などに工夫をして、実際に彼らが遭遇しそうな会話を作成して練習するようにしている。

専門日本語については、既存教材になかなか適当なものがないため、目標言語に合わせて講師が既存教材に手を加えたり、オリジナルの教材を作成して使用している。

5 専門日本語

基本的な文法の指導がある程度進んだところで、専門日本語の指導を始めている。

学生に必要なのは、実際に仕事の場で生かせる日本語である。机上の学習だけにならないように、実際に宿泊カードに記入させたり、鍵の受け渡しをするなど、体の動きを伴った練習を心がけている。カレッジの学生は勉強熱心なので、テストだと言えば長い会話文もしっかり暗記してくるが、実際に状況を理解して暗記しているのか疑問に思うことがある。動きを伴った練習によ



ツーリズムコースの学生が作成したケニアのガイドブック

で、発話の意味を体に染み込ませて欲しいと思っている。

また、接客業という性質上、日本人に悪印象を与えないような立ち方、お辞儀の仕方、ジェスチャーなどの非言語行動も折に触れ指導するようにしている。

ほかには、学生が他の科目で勉強した知識を日本語のクラスで生かしたクラス活動も行っている。たとえば、ツーリズムの学生はコースの総まとめとして、ケニア紹介のガイドブックを作成している。ケニアの歴史や文化、国立公園の案内や動物の特性を彼らのレベルの日本語でまとめる作業は決して簡単なものではないが、オリジナルのガイドブックが出来上がったときの達成感はその苦労を忘れさせるようだ。

6 今後の課題

一番の課題は、学習者にいかに多くの日本語環境を与えていくかであると思う。これは、海外の日本語教育機関が共通に抱える問題であると思う。残念ながら、現状

ではほとんどの学生が、教師の日本語しか接することのないまま卒業してしまう。実習先で日本人観光客に接するチャンスがあっても、ただどしい日本語に対して英語での説明を要求され、すっかり自信を失ってしまった学生もいる。今後は、ナイロビの日本人会や日本大使館の広報文化センター (Japan Information & Culture Centre) にも協力を求め、教室以外で日本語を使う機会を増やしていきたい。また、カレッジにも「日本語クラブ」のような、気軽に参加できるサークルを作り、カレッジ内の日本語熱を高めていきたいと思っている。

現在、日本語セクションには日本人講師がいるが、カレッジ側は、将来的には他の言語セクションのようにケニア人講師だけで日本語コースが運営できるようにしていきたいと考えている。そのためにも、このカレッジのニーズに合った教材を充実させることが重要である。また、専門会話のテキストに付随した視聴覚教材も作成したいと思っている。前述のとおり、機能的な会話には、会話が行われる状況をよく把握することが大切である。ビデオ教材は学習の大きな助けになると思う。

ウタリーカレッジにおける日本語教育に求められているのは、観光業で役立つ日本語力を身に付けさせることである。学生に必要な日本語を効率よく教えるためにも、語学教師も観光業について知識を持つておく必要があると思う。将来、学生がどんな状況に出会うのか、そこではどんな会話が繰り返られるのかを他の部門の協力も得てよく把握し、ウタリーカレッジならではの観光業の日本語コースを作り上げていきたいと思っている。



トレーニング・レセプションで勉強中のフロントオフィスコースの学生